

2022. 3. 27. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書 10章 35～45節
『仕える者になりなさい』

本日の聖書の箇所直前には、三回目となりますイエスの受難予告が記されています。9章と10章にはこのように初代教会内に起こった俗的な議論と受難予告が交互に述べられてゆきます。これは俗的な関心事、つまり人間的な事柄を人間の知恵やルールで解決してしまおうという意見に対して、実はそうではなく、人間的な事柄ゆえにイエスの受難との絡みで議論を推し進めるということの重要性をマルコは提案しているのです。

ここに、生きたイエスの姿と生きる人間の姿が交差してゆくのです。

本来この記事は、イエスがゼベダイの子たちの要求を受け入れたという伝承です。しかし、この伝承のままだと福音書のつじつまが合わなくなってしまう。まだそこいらにゼベダイの子らの関係者がいた時代です。その配慮からマタイは20章でゼベダイの息子たちの母の要求に置き換えて緩和しています。ルカに至ってはこの伝承に触れさえしていません。しかし、マルコは躊躇することなくこの伝承をそのまま受け入れ、本来の伝承とは真逆に、彼らの要求を拒否されるイエスを描き出しました。

37節で彼らは要求します。「右か左に座らせてくれ」と。後に「使徒」と呼ばれたヨハネとヤコブですが最初はこんなものだったのでしょうか。マルコはここで弟子たちの相も変わらぬ無理解と愚かさを強調します。41節では、この二人の抜け駆けを他の弟子たちが聞いて「腹を立て始めた」といいます。どっちもどっちの弟子たちの姿が克明に表現されています。三度も受難予告を経た後でもこのていたらくです。イエスもいかげんイヤになったことかと思えます…。全員がいまだ地位への関心から自由になっていないということです。けれども、この忍耐をもつての繰り返しが初代教会の教育課程だったのです。

イエスはそんな彼らに38節で「あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっていない」と言われ、「わたしが飲む杯」を受けられるかと問われます。杯とは信仰・希望・愛の象徴と同時にイエスの受難と死を意味します。余談で

すが、ヤコブは44年にヘロデ・アグリッパ I 世に剣で殺害されます(使徒 12;2)。でも当時の弟子たちにはそんなことはさっぱり分からなかったのです。

イエスは続けて42節で「支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている」と語られます。あなたたちは支配者や権力者になりたいのかと問われるのです。

イエスは44節以下でこんな弟子たちに「仕える者になりなさい」と丁寧に語られます。

キリスト教は信仰・希望・愛であるといわれます。この信・望・愛の実態とは何なのでしょうか。それは相手をそのままに受け入れる開いた心なのです。開いた心は神を受け入れて信仰となり、自分を受け入れて希望となり、隣人を受け入れて愛となるのです。その開いた心とは、自分で完結しようとする心です。完結してしまえば人生の大切な部分を失ってしまうことに気づいている心です。そして何よりもその開いた心とは、仕える者になることを通してしか自らの内に獲得出来ないものなのです。

贖罪としてのイエスの死が、仕える者になりなさいというイエスの生と共に語られているところ、ここに福音の質が示されて行くのです。